

色彩映画のシナリオ

中井正一

私はフィルムが色彩を駆使するにあたってそれを「天然色映画」と名づけているのに、反対である。すでに映画が芸術であるかぎり映画は、必ずしも天然の色と称するもののみに似ることをのみ標準とする名前をつける必要はないのである。

それは、むしろ簡単に「色彩映画」とよばれるべきであり、シナリオ・ライターは、そのシナリオで作者の意図にしたがって、おちついたソフト・トーンの色、またはコントラストの強いアクセントの色、あるいは、茶またはセピア色のトーン、または、一様に淡い色のタッチなどを注文することが、将来可能であり、その用意のための最初の命名が望ましいのである。

色彩映画が始まるや、シナリオ・ライターは、一つの大きな幻想の新しい世界が切り開

けたと同時に、一つの色彩の作曲的な構想が必要となってきたのである。

ちょうど詩の韻律が、語音のリフレインの繰り返しであった、一つの芸術感がもたらされるように、色がその役割りをもってきたのである。

例えば『暁の電撃戦』“The West
ern Approaches”において、
基調は大西洋の海の青さであり、その空にひろがる雲は、そのヴァリエーションであった。その中に、繰り返し、繰り返し出てきたポートの帆の赤さは、そのリフレインの主題の役目をもっていたのである。

あの映画の中で、なお一つ注意すべきは、全シナリオを通じて、それが赤い色であることをもつてのみ、この筋をひきしめ、その赤さは、人々をして、目にしみ入るほどの強い印象をあたえた一つの赤い色があった。

それは、シナリオ・ライターが、胸にかくしもつて、それが金筋のハイライトの役割り

をもつものであった。それは、ほんの二点の
灯にしかすぎなかったが、小さな消えつつあ
る電池によって点じている電信機に灯ってい
た「赤い色」であった。その赤い火が灯って
いるかぎり、ボートの乗組員の位置が大西洋
を航行しているいずれかの船に、S・O・S
のモールス信号を伝えうるのである。

しかも、その「赤い色」は、そのキーをう
つ者だけに見える小さな灯なのである。全乗
組員は、ひそかに、心の中で、その赤い灯が
消えはしないかと、怖れている赤さなのであ
る。その赤さが、小さくなり、ついに消える
時がくるのである。それを見つめる電信技手
の瞳、止まる手、その音の消えたのを深い怖
れで、見かえす少年の瞳、瞳と瞳、電信技手
は、表情をあらためてあたかもその赤さが消
えていないがごとく、カタカタカタとうちつ
づけているのである。

しかし、その中の幾人かは、そのカタカタ
カタとうつ音が、無意味の音であることを知

っている。

あの消えていった、赤い電灯、小さな直径二分ばかりの灯が、全シナリオをキーンと引きしめている。

そして、最後の帆の赤さに、それは転じていくが、大西洋のただなかに、今まで、多くの人々の命をささえた赤い帆が、今は人もなくたれ下り、船路の後に、ただ一つ残っているのである。

シナリオは、この一つの船を、ただ一点になるまで、いつまでも、いつまでも、凝視すること求めている。

それは、孤独というところを、あくまで、追い凝視している。映画の中に見る深い詩のころである。私はイギリスのシナリオの中の伝統を感じずにいられなかった。

これまでリフレインとしてあった帆の赤さが、ここで、みごとな終曲の尾を引いて、一つの典型的な色彩作曲のみごとな創造を試みているといえるのである。

『赤い靴』の赤さは、やはり、色の韻律のリ
フレインのテーマとして、リズムカルに、そ
の筋を色どると共に、一本の赤の錦のように
それをしっかりと縫い進んでいる。そして、
血汐の赤さの中に濡れてフィナーレをしめゆ
くのである。

かつて、作曲法が、その法則を生むまでは
多くの巨匠が、創造の上に創造をかさねて、
それを定型化していったのである。

色彩映画の色彩作曲の様式は、今後のシナ
リオ・ライターの課題である。今、イギリス
とアメリカは、いろいろの試みを私たちの前
に展開しているのである。

音楽の楽器に関して、近代音楽については
日本は多少の立ちおくれをしていたといえよ
う。しかし、日本の絵画、衣裳史を顧みるに
世界に比類をみない、豊富な高度な色彩感の
閱歴をもっているといえるであろう。

色彩映画の技術陣の人々は、日本民族の豊
富な色彩感と、そして絵巻の伝統で鍛えられ

たる色彩構成の伝統を、世界にデビューする機会を、今眼前にしたことを強く意識すべきである。

次のことが、一版に注意されるべきである。

一 色彩のもつ韻律的な構成。

二 そのヴァリエーションへの注意。

三 全体を見透しての、盛りあげに用いられるところの色彩の用意。

四 全色彩トーンを何に置くべきか。

さらに、いかに配置すべきか。

例えば、海の主題を取りあげてそれを貫いてみるごときそれ。あるいは、全体を淡くするかまたはコントラストを強くするべきか。

五 シナリオの筋と、色との配合、同調すべき場合と、むしろコントラストを強くする場合。

六 シナリオでは説明となり、ダレるところを、色彩のリズムで救うという新たな救

濟策のあらわれたこと。

七季感のもつ芸術的役割りがますます重大

となってきたこと。

かく考えてくると、ちょうど、トーキーとなつた時、シナリオ・ライターがとまどつたと同じような自由のもつ一つの彷徨が、色彩映画になつた時、シナリオ・ライターをもつているように思われる。そこで色彩への日常の敏感な観察と訓練が、ライターに要請されてくることとなると思われる。ここに新たなる有能な色彩映画のシナリオ・ライターが、斯界に躍りいでられんことを、ひそかにまつものである。

* 『シナリオ』一九五一年四月号

底本：「中井正一全集 第三巻 現代芸術の

空間」美術出版社

1981（昭和56）年5月25日新

装第1刷

初出：「シナリオ」

1951（昭和26）年4月号

入力：鈴木厚司

校正：宮元淳一

2005年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、
青空文庫で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

辺境文庫にてPDF製本

2008年二月作成